



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association 2012.7 第48号

SPF豚協会認定制度の将来課題

一般社団法人日本SPF豚協会会長 北島 克好
全農畜産サービス(株)代表取締役

日頃会員の皆様には協会活動に対してご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、すでに4月に公表した通り、今年3月末の全国のSPF認定農場数は187農場で前年より3農場減となりましたが、飼養種豚総頭数は79,061頭で前年比1,556頭の増となり、1994年(平成6年)に認定制度を開始して以来、最高の頭数を記録しました。国内の母豚頭数(2011年2月現在)に占めるシェアも8.8%(前年比0.5%増)と、我が国においてSPF種豚の存在はますます大きく、重くなってきている状況です。

一方、海外での状況についてですが、最近、規模で世界のトップ3に入る2社の種豚会社のオーナーに現地で直接お会いする機会を得ました。

1社は、植物油原料生産組合をバックに、魚を含む複数の種で世界No.1もしくはNo.2の育種会社を傘下におく育種専門会社として、生産者の最大利益を提供することをゴールとして目指す会社、もう1社は、食肉会社をバックに、養豚生産者組合が会社を組織して生産者への利益還元をゴールを目指す会社で、それぞれの事業哲学は違うものの、世界を相手に市場を席巻している会社です。

どちらのオーナーに尋ねても、SPF豚は自社のGGP・GP農場、もしくは買収した種豚会社が所有している農場でのみで、CM農場への展開についてはほぼ無反応(無意義?)でしたが、日本では飼料会社をバックに、種豚会社がSPF種豚を生産・販売し、CM農場も認定制度にもとづきSPF農場として展開しており、国内で養豚生産・戸数が縮小する中、SPF豚事業が年々シェアを拡大し存在感を示していることについては大きな関心を持ったようでした。

彼らには、SPFという枠の中でもCM農場で優れた成績を残したGPのAI精液は、一定の衛生基準を

独自に設ける中でGGPの育種改良に資することを了とするシステムがあり、特定有用遺伝子検査と組み合わせて世界中のGP農場からAI精液が取寄せられることによって、改良速度を上げているのには目を見張るものがあります。

わが国のSPF養豚においては、外部導入は帝王切開を唯一とし、世界で冠たるSPFピラミッド内ではワンウェイを堅持して、これまでCM豚に至るまで高い清浄性を維持してきたことは言うまでもありません。一方で、種豚の改良については世界の後追いになりがちで、とくに繁殖成績、飼養効率についてはその差がますます広がっているように感じる昨今です。

今後、TTP等で海外との価格、品質との競争がさらに激しくなると予想されることから「今のままで本当によいのか」との命題が眼前に横たわっていると思います。

また、協会認定制度の柱ともいえるヘルスチェック検査も、と畜場での鼻・肺の自主検査が年々厳しく制限されるという現実があります。また、遺伝子診断や検査機器の進歩が日進月歩の中で、今まで確実な検査手法がなかった病原体についても、複数の診断法によりリアルタイムで明らかにできるようになってきています。排除すべき、生産性を大きく阻害し経営的な損失を引き起こす対象疾病についての取り扱いも大きな検討課題と考えられます。

現在、協会として伝統ある「SPF養豚事業」を将来に向けてどのように振興・発展させていくのか、特定排除疾病や検査方法の見直しも含め、有識者に検討を始めていただいているところです。

協会事業の根幹であるSPF認定制度について、会員の皆様のご意見を拝聴したいと考えております。ぜひご協力いただきますようお願いいたします。

今年度の社員（代議員）総会を開催

事業計画など全ての議案を承認

本年度の定時総会（代議員会）は6月13日（水）、東京都千代田区のKKRホテル東京において開催されました。昨年度の事業経過報告はじめ同決算および監査報告、代議員および理事の交代、今年度の事業計画および予算案などすべての議案が承認されました。概略は次の通りです（会員の皆さまには議案および議事録をすでにお送りしてあります）。

23年度事業経過報告

東日本大震災のショックを引きずりながら、重苦しい空気の中、平成23年度はスタートしました。また、欧米の経済危機を受けて、記録的円高が続き、国内産業の疲弊が一段と深刻になってきています。また、原発事故を機に、生産活動の要である安価なエネルギー確保が、産業界の重要な課題となってきました。

11月に発足した野田内閣はTTP（環太平洋経済連携協定）交渉への参加を表明しました。農産物の関税撤廃問題は厳しい局面を迎えています。

身近な出来事としては、農場HACCP推進農場の指定が実施されています。これは農水省が農場HACCPの普及推進を謳って、実行しているものです。養豚関係では、3月現在で、31農場が推進農場の指定を受けています。

このような環境の中、日本SPF豚協会はSPF豚農場認定制度を柱として各事業に取り組みました。厳しい養豚環境の中、認定申請を見送る農場もありましたが、認定農場数は187（GGP・GP19農場、CM農場168）で、飼養母豚数は7万9,061頭となりました。

生産成績は、繁殖農場（Ⅱ）で若干の低下が見られましたが、一貫生産農場及び肥育農場（Ⅱ）では横ばいでした。

SPF豚事業の啓蒙活動としては、10月に川崎市で開催された「ちくさんフードフェア」に出展、SPFポークの試食、アンケートおよびパネル展示を実施しました。天候にも恵まれた昨年と同フェアには、2日間で約12万人の来場者がありました。

11月にはSPF豚セミナーを開催し、100名のご参加

をいただきました。

利用促進をお願いしていた認定農場産SPF豚シールの販売は720万枚（前年度比101.4%）に留まりました。協会オリジナルキャップとTシャツの販売、および、ポークリーフレットの配布は引き続き行なっています。

協会会報『日本SPF豚協会だより』は、予定通り43号、44号、45号、46号を発行いたしました。

主な事業経過は次の通りです。

- ・ 5月13日（金）平成22年度会計監査
- ・ 5月16日（月）正副会長会議
- ・ 6月9日（木）認定委員会
- ・ 6月16日（木）理事会および定時社員総会
- ・ 7月5日（火）正副会長会議
- ・ 7月26日（火）ピラミッド会議
- ・ 8月9日（火）ちくさんフードフェア企画委員会
- ・ 8月29日（月）生産成績優秀CM農場選考委員会
- ・ 9月8日（木）認定委員会
- ・ 9月16日（金）技術懇談会
シムコピラミッド千葉地区、15農場25名参加
- ・ 9月20日（火）ちくさんフードフェア企画委員会
- ・ 10月8日（土）、9日（日）ちくさんフードフェア
於：川崎市・（財）日本食肉流通センター
- ・ 10月31日（月）正副会長会議
- ・ 11月15日（火）平成23年度SPF豚セミナー
於：KKRホテル東京
- ・ 12月8日（木）認定委員会
- ・ 1月31日（火）正副会長会議
- ・ 3月8日（木）認定委員会
- ・ 3月30日（金）理事会

24年度事業計画

防疫設備基準、防疫管理基準の徹底

S P F 豚農場認定規則及び関連する基準、細則に基づき、厳格な運用を行います。

特に今年度は認定農場の防疫設備基準の順守状況を確認します。

認定委員会の開催

S P F 豚農場認定事業を推進します。認定委員会は6月、9月、12月、3月の計4回開催いたします。

S P F 豚認定制度の見直し

次世代の認定制度はどうあるべきか、排除対象疾病のあり方や検査方法等を含め、有識者による専門委員会を設置、制度の見直しについて検討を始めます。

認定成績集計結果のフィードバック

引き続きS P F 豚農場認定申請時に提出される生産成績を集計し、認定書交付と同時にこれまでの成績の推移を、また年度末には、各認定項目の順位表を、各ピラミッドを通じて農場にフィードバックします。ベンチマーキングに活用して農場成績の改善に役立てていただくほか、地域研修会等で検討していきます。

生産成績優秀CM農場の表彰制度の継続

例年通り、生産成績優秀CM農場を選考委員会により選定、セミナーで表彰します。さらに、新たな表彰の対象項目についても検討を加えていきます。

ピラミッド委員会の開催

円滑な事業推進のためピラミッド会議を開催し、生産成績低位農場の改善策、会員の拡大方法、セミナー・地域研修会・技術懇談会等のテーマなど、具体的に検討していきます。

S P F 豚セミナーの開催

今年度のS P F 豚セミナーは、11月6日（火）、KKRホテル東京で開催する予定です。

地域研修会と技術懇談会の開催

日時、場所、テーマ等、ピラミッド会議で検討していきます。また、開催地域の優秀農場を中心にした技術情報交換会を検討します。

協会だよりの発行

47号（4月）、48号（7月）、49号（10月）、50号（1



月）を発行します。

販促用資材の制作と普及

引き続き店頭用ポークリーフレット、協会パンフレットを希望会員に無料で配布します。また、認定農場向け協会オリジナルキャップとTシャツの販売も継続します。

S P F 豚肉に対する正しい知識の普及

全会員と協力して、さまざまな機会をとらえ、S P F 養豚の仕組みと生産情報がわかるような正しい「S P F ポークに関する知識の普及」に努めます。

●イベントへの参加

昨年同様、10月6日（土）、7日（日）に開催される日本食肉流通センター主催「ちくさんフードフェア」に参加します。

アグリフードE X P O 等への出展を検討します。地方開催のイベントが少ないため、関東（東京、神奈川、千葉等）が中心となります。

●S P F ポーク販売店情報の収集、整備

引き続き関東圏を中心にS P F 豚取扱い店舗訪問を実施します。集めた情報は「ちくさんフードフェア」で提供する予定です。

また、認定農場のネット販売の状況について会員にアンケートをお願いし、ちくさんフードフェアやホームページ等での紹介システムを検討します。

●認定シールの利用促進、啓蒙資材の制作

認定シールの運用規則を見直し、利用しやすい方法を検討します。プライベートシールを使用している農場に対し認定マークの刷り込み等活用をお願いしていきます。

またS P F 豚啓蒙用資材（パネル等）を制作、展示場所、方法について検討していきます。

レンサ球菌症①

東京農業大学教授 山本 孝史

健康豚の鼻腔、扁桃、消化管、生殖器には多種のレンサ球菌が生息していますが、ブタに起病性を示す菌種は、*Streptococcus suis*, *S. dysgalactiae* subsp. *equisimilis*および*S. porcinus*です。中でも*S. suis*による疾病は、養豚上最も重要であり、また人獣共通感染症でもあります。

1) *Streptococcus suis*感染症

本病は比較的新しい疾病で、英国（1954）で髄膜炎と関節炎、オランダ（1951, 1963）で髄膜炎と敗血症例が報告されてより世界各地で知られるようになりました。上記の病型の他、心内膜炎や肺炎を起こすとされていますが、肺炎に関しては単独で起病性を示すかどうか疑問視されています。

原因と発病要因

*S. suis*は、莢膜多糖の抗原性の違いにより、現在35の血清型に型別されています（1～34型および1型と2型の両方と反応する1/2型）。わが国を含めて多くの国で病豚からは2型が最も多く分離されていますが、オランダ、ベルギー、ドイツ等では9型が、英国では1型が最も多いことが報告されており、血清型の分布にはある程度地域性が認められるようです。その他の血清型では、1/2, 3, 4, 7, 8型が多く分離されています。一方ヒトでは、患者由来株のほとんどが2型に型別されています。このようにブタでもヒトでも2型が最も高頻度に分離されることから、2型の病原性が最も強いと考えられており、また実際2型が健康豚に存在する割合は低いとされています。一方、2型菌株の全てが強毒ではなく、また仮に強毒の2型菌株が鼻腔や扁桃に存在していたとしても必ずしも発病するとは限りません。全頭が本菌を保有していたとしても発病するのは5%以下という報告もあります。

本病は、養豚の多頭化とともに出現してきたことから明らかのように、蜜飼、換気不良、過度の温度変動、

さらには2週齢以上開きのある子豚の群飼等が発病要因となります。

症状と病変

発症するのは5-10週齢豚が多く、最初に見られる症状は42.5℃にも達する発熱ですが、他に症状を示すことなく死亡する甚急性例もあります。通常は、

発熱後、元気消失、食欲減退、跛行等が見られ、次いで、ごこちない動作や不自然な姿勢（写真1）、震えに続いて、痙攣、起立不能（写真2）、後弓反張（背筋の痙攣により胴体を弓なりに反らせる）、眼球振盪等の神経症状が見られるようになります。肉眼病変は甚急性に死亡した場合は認められませんが、神経症状が見られた場合は髄膜炎の充血が、関節炎の症状が見られた場合は、関節滑液が膿性、線維素性あるいは線維素膿性となって増量し、関節嚢の肥厚や関節滑膜の紅斑が認められます。さらに多くの場合心臓に病変が見られ、線維素膿性の心外膜炎、いぼ状心内膜炎の他、出血性壊死性心筋炎が見られることもあります。また肺炎が見られることも多いですが、病変はまちまちで、*S. suis*以外の細菌が同時に分離されることが多く、肺炎病変は本菌に特有のものではないと考えられます。（以下次号）
<参考文献>

Smith, W. J. et al. (1990). A color atlas of diseases and disorders of the pig. Wolfe Publishing Ltd., 108-109.



写真1 感染初期。頭部が傾いている。
(原図：参考文献)



写真2 起立不能となった子豚（原図：参考文献）。

豚舎周辺に生息するハエ類Ⅱ

イカリ消毒^(株)技術研究所 木村 悟朗

前回に続き、豚舎で主要なハエ類、特に非吸血性ハエ類の形態的特徴や生態についてまとめます。

イエバエ類

わが国において、イエバエ属に属するハエは9種記録されています。それらの中で、イエバエ(写真1a、1b)は最も普通で、衛生害虫または不快害虫として重要な位置をしめています。成虫の体長は6.0～8.0mm、胸部は黒褐色で、胸背に4本の黒縦条があります。前胸側板に微毛を有することで、他のイエバエ属と区別できます。雌雄ともに腹背の第2、3節に黄紋があります。わが国で、本種は鶏舎・牛舎・豚舎などの畜舎、芥溜め、ゴミ処理場などに多く見られます。幼虫の発生源は家畜の糞、生ごみ類、動植物性の腐敗物ですが、牛糞では敷き藁などが混じった堆肥、ブタ、ニワトリでは堆積した糞そのものに発生します。また、人糞でも発生することがあります。

20℃条件下におけるイエバエの卵期間は約1日、幼虫期間は9日、蛹期間は10日です。卵から成虫までの発育零点は11℃で、雌は1回に平均120個の卵を産み、生存期間中に3～5回産卵します。イエバエの繁殖力は29℃で最高となり、33℃以上では繁殖力は低下し、

15℃以下では産卵が停止します。イエバエは休眠をせず、寒冷な地方では成虫が逃避行動をとりながら越冬すると考えられています。イエバエは7～42℃の範囲で飛翔可能であり、その飛翔距離は通常、発生源から1～3km程度ですが、大量発生時には5～6kmの距離を飛翔することが報告されています。

イエバエは衛

生上重要な種であり防除の対象となっていることから、殺虫剤メーカーの研究所、国公立の研究機関、および大学などで様々な系統が累代飼育され、数多くの研究がなされています。畜舎などに発生しているイエバエは殺虫剤抵抗性が発達していることがよく知られています。殺虫剤抵抗性発達のメカニズムを研究するときに、様々な衛生害虫や農業害虫の中でイエバエが実験材料としてしばしば用いられる理由のひとつには、これまでの基礎遺伝学的な背景があります。

オオイエバエ類

わが国において、オオイエバエ属に属するハエは5種記録されています。それらの中で、北海道から南西諸島まで広く分布するオオイエバエは畜舎で多く見られます。成虫の体長は7.0～9.5mmでイエバエより大型、胸背に4本の黒縦条があるがイエバエと比べ不明瞭であり、腹部は黒褐色で市松模様であり、黄紋はありません。本種は脛節と腿節先端3分の1が赤褐色であり、他のオオイエバエ属と区別できます。幼虫はニワトリ、ウシ、ブタ、ヤギ、イヌなどの家畜や動物の糞、人糞、および野鳥の糞などから発生します。

20℃条件下におけるオオイエバエの卵期間は1.5日、幼虫期間は10～11日、蛹期間は16～17日です。1、2齢幼虫は糞食性ですが、3齢幼虫は発生源の糞内に他の幼虫が存在するときにはそれらを捕食する任意的捕食者と考えられています。本種はイエバエ幼虫を好んで捕食するようですが、本州と北海道におけるオオイエバエとイエバエの発生時期はずれているため、発生時期の合うヒメイエバエを捕食している可能性が指摘されています。

<参考文献>

岩佐光啓(2003) ハエ類. 生活害虫の事典(佐藤仁彦編) pp. 104-116. 朝倉書店, 東京、松崎沙和子・武衛和雄(1993) 都市害虫百科. 236pp. 朝倉書店, 東京、篠永 哲(1988) オオイエバエ. 原色ベストコントロール図説Ⅲ(日本ベストコントロール協会編) pp.41-1-41-5. 日本ベストコントロール協会, 東京、篠永 哲(1995) イエバエ. 原色ベストコントロール図説Ⅲ(日本ベストコントロール協会編) pp. 42-1-42-12. 日本ベストコントロール協会, 東京、富田隆史・正野俊夫(1991) イエバエ. 昆虫の飼育法(湯嶋 健・釜野静也・玉木佳男編) pp. 349-353. 日本植物防疫協会, 東京.



写真1a イエバエ成虫



写真1b イエバエ幼虫

シムコピラミッドの新GGP農場が完成 竣工式・祝賀会を実施

秋田県大館市に建設中だったシムコピラミッドの新しいGGP農場「大館GGPセンター」が完成の運びとなり、去る5月30日、竣工式および完成祝賀会が開催されました。

飼養母豚規模は常時350頭、シムコピラミッドとしては八尾GGPセンターに次ぐ原々種豚場です。事業総面積は約21ha、施設用地は約4ha、7月から豚の導入を開始、本格稼働後は年間6,000頭の出荷を予定しています。

現地では竣工式の神事等を執り行ったのち、市内ホテルに移動して行なわれた祝賀会の席で挨拶に立った株式会社シムコの端坊充央社長は「地元大館市の誘致、全面的な協力のもと、とんとん拍子で進むものと思っていた矢先、口蹄疫の発生、追い討ちをかけるような東日本大震災による自社農場の被害で、一時は建設断念も意識したが、関係各位の多大なる支援があって、今日を迎えられた。新農場は従来の養豚場のイメージからはかけ離れていると思われるかもしれないが、弊社の半世紀にわたるSPF養豚

の技術の結晶ともいえる。

建設にあたっては、環境対策協議会を設立し、地元の皆さんにご理解いただけるよう努力した。条例制定など受け入れ態勢を整えていただいた大館市のためにも、地域に愛

される企業として、循環型農業の実現に貢献していきたい」と抱負を述べられました。新たな生産拠点の誕生で、協会生産ピラミッドのさらなる飛躍が期待されます。



大館GGPセンター（上）
祝賀会で挨拶するシムコの端坊充央社長（下）

●協会からのお知らせ●

●代議員・役員交代

組織内人事異動により、中・四国地区選出代議員で監事の本野憲一氏（株ユキザワ）に代わり、平井 勇氏が就任されました。

●10月のちくさんフードフェアに出展します

昨年引き続き、今年も川崎市東扇島の(財)日本食肉流通センターで開催される「ちくさんフードフェア」に

●SPF豚研究会から●

●研究会は7月26日開催

第22回日本SPF豚研究会は、7月26日（木）午後1時より、東京大学山の上会館大会議室（東京都文京区本郷）にて開催されます。協会からは恒例の「認定農場の生産成績年次報告」に加え、関東地区の認定農場におけるワクチンの使用状況について、藤田世秀専務理事の講演を予定しております。

協会として出展いたします。皆さまのご協力をお願いいたします。詳細は改めてご案内いたします。

●11月6日にSPF豚セミナーを開催

本号3ページでもご案内の通り、恒例のSPF豚セミナーを11月6日（火）、東京KKRホテル東京にて開催する予定です。詳細は改めてご案内いたします。ぜひご参加ください。

す。

研究会の会員になられている方の参加費は無料です（懇親会会費は別途）。研究会会員の方には事務局よりご案内が届いていると思いますが、参加のご希望、ご不明な点等は日本SPF豚研究会事務局（伊藤忠飼料(株)研究所内）までお問い合わせ下さい。

TEL：0287-64-3652 FAX：0287-63-8384

SPF豚肉とオレンジのあっさり瞬間煮込み

●レシピ提供・「南フランス料理気まぐれ市場」オーナーシェフ 平川 了児（京都府八幡市）

前号に引き続き平川シェフにフランス料理のレシピをご紹介します。煮込みとありますが、煮込む時間はわずか、オレンジとの相性もよく、味付けもシンプルで、夏らしい、さわやかな逸品です。

●材料●（4人前）

SPF豚肩ロース（100g程度） 4枚
季節の生野菜（サラダ用、好みのものを） 適量
オレンジ 2個
白ワイン 100cc
オレンジジュース 100cc
オリーブ油 適量
片栗粉 少々
塩・黒粒こしょう 少々

●つくり方●

- ① 豚肉は細切りにして塩・こしょうし、1時間ほど冷蔵庫に入れておきます。
- ② オレンジは皮を向いて薄皮を取り除き、適当な大きさにカットします。
- ③ ①を取り出し、片栗粉をまぶします。
- ④ フライパンにオリーブ油を入れて熱し、③を中火で焼き、焼き色をつけます。
- ⑤ 白ワインとオレンジジュースを入れて5分ほど煮込みます。
- ⑥ 火を止めてオレンジを入れ、さっと混ぜ合わせます。
- ⑦ 皿にサラダ用の野菜を敷き、その上に盛り付けます。



【平川シェフからのアドバイス】

肉に片栗粉をまぶした方が口当たりがよくなります。
オレンジは一房ごとに薄皮をていねいにとった方が苦味がありません。

●認定情報●

●平成24年度認定農場

[6月認定] (有効期間：平成24年6月7日から25年6月30日まで)
北海道・(有)鈴木ビビッドファーム、青木ピッグファーム、(有)ゲズント農場、ホクレン養豚技術センター、(有)フロイデ農場、青森県・カワケンSPFファーム、同第三農場、岩手県・FVファーム、秋田県・JA秋田しんせい肥育豚農場、福島県・(有)東和牧場、茨城県・(有)弓野畜産繁殖農場、同八郷農場、同千代田農場、(有)篠崎畜産、(有)奥田農場、群馬県・JA東日本くみあい飼料(株)利根スワインセンター、千葉県・石毛宏司養豚、高橋幸雄養豚、塚本利昭養豚場、宮澤光男養豚場、(株)林商店、吉田道養豚場、(有)藤崎農場松尾繁殖農場、同飯岡肥育農場、江波戸SPF農場、(有)下山農場第2農

場、(有)ピギー・ジョイ第1農場、木内養豚第1農場、同第2農場、兵庫県・(農)八鹿畜産河上農場、同小田垣農場、鳥取県・(株)西日本ジェイエイ畜産名和農場、岡山県・岡山JA畜産(株)荒戸山SPF農場、愛媛県・富永養豚場、旭養豚場、(有)多田ファーム、佐賀県・JAさが富士天山ファーム、長崎県・JA全農長崎県本部五島種豚供給センター、(有)伊藤ファーム、浜田養豚、宮崎県・(有)レクスト、江夏商事(株)御池農場、クリーンファーム(株)、江夏商事(株)川南農場、鹿児島県・(株)かいたく大口農場、鹿児島いずみ畜産(株)三笠農場、(有)さつま農場
(以上47農場)

※次回認定委員会は平成24年9月13日(木)の予定



(有)篠崎畜産
篠崎 正美さん
 ●茨城県稲敷市

自家生産・自家販売にこだわり 喜ばれる美味しい豚肉づくりを

茨城県南部に位置し、霞ヶ浦、利根川などの豊かな水辺に恵まれ、水運と農業を主として発展してきた稲敷市。その利根川水系の一級河川である新利根川沿いの田園風景の中に、今回紹介する(有)篠崎畜産の農場があります。篠崎正美さんはその代表取締役です。

(有)篠崎畜産が養豚業を始められたのは平成元年。肉問屋を営んでいた正美さんのお父様である先代社長が、地域養豚家の減少もあって集荷に困っていたことから自ら養豚をやろうと一念発起されました。当時の小売店からの紹介でSPF養豚を知り、母豚70頭からスタートしました。そして現在は150頭規模で運営されています。

今年50歳になる正美さんは、スタートがお肉の間屋であったこと、そして肉豚出荷のうち約40%を今でも小売店などに自家販売していることから、「口に入れておいしいと言ってもらえることを喜びに、安心できる美味しい豚肉をつくること。そしてお客さんに喜んでもらえる豚肉づくりをすることが自分たちの生き残る道」とおっしゃいます。投薬を極力減らし、こだわりの飼料を選び、安心・安全を届けることをモットーに仕事をされています。

そんな豚肉づくりに余念がない正美さんの趣味はというと「釣りと車」だそうです。釣りは主に海釣りに



正美さん(中央)と奥様の美佐子さん、一希さん

行かれることが多く、それも夜中に出かけて朝7時ころには戻ってきて、すぐに農場の仕事に励んでおられるとのこと。また、たまの休みには、大きなキャンピングカーを運転し、ご家族で箱根などに行かれることもあるそうです。しかし、なんといっても「一番の趣味は仕事」で、今後の農場の展開など考えることが楽しみ、とおっしゃっていました。

今では、息子さんの一希さんも農場に入られており、親子三代の養豚家となっています。

そんな正美さんの今後の目標は「原点である小売店などへの自家販売を継続していくこと。これは、自分の豚肉の評価をダイレクトに聞けることが励みにもなるし、意欲にもなる」。さらに、もう一つは地に足をつけた規模拡大。「規模拡大は販売先からの供給量を増やしてほしいとの声に応えるため。とにかく美味しい豚肉をつくり、販売もしていきたい」とのことです。豚肉へのこだわりを持って養豚にかける情熱を、熱く力強く語っていただきました。

(伊藤忠飼料(株) 君野 嘉洋)

編集後記

原稿の是非、除染、節電対策、社会保障・税一体改革と難題が目白押しです。気分がモヤモヤしますね。2011年のSPF豚農場の生産成績では1母豚あたりの年間肉豚出荷頭数は21.35頭、全国平均は18頭強です。スカッとしません。SPF種豚の育種改良は進んでいるのでしょうか。年間肉豚出荷頭数25頭、肉豚の飼料要求率が3.0を切る、産肉性・肉質ともに一級品という種豚は夢物語なのでしょうか。系統造成もお金を使った割にはその成果を実感する機会が少ない気がします。何がどう変わればいいのかですね。(世)



日本SPF豚協会認定農場産シール
 このマークは
日本SPF豚協会の
 登録商標です

日本SPF豚協会だより

第48号 2012年7月1日発行(季刊)
 発行 一般社団法人 日本SPF豚協会
 〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
 TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
 e-mail : j.spf.a@nifty.com
 http://www.j-spf.com/
 発行人 北島 克好
 編集人 藤田 世秀